

中津貝塚出土土器の抱える問題点

加 納 実

はじめに

土器型式の編年学的研究の課題は、時間的傾斜を捉えることのできる一系統の土器群の抽出・細分により、一層精緻な時間軸を設定し、更には他器種との共伴関係の変化をも明らかにしてゆくことであろう(註1)。又、系統の折衷及至融合した土器の存在や、各遺跡・各地域に於ける系統の錯綜の背後にひそむ人間の動きをも射程に置いた研究をも深化させてゆかなければならない。しかし、編年研究を推し進めてゆく上で同時に忘れてはならないのは、研究方法上の概念としての「型式」を純粋化して捉えてゆくことである。すなわち、時間的傾斜を捉えることのできる一系統の土器群を如何なる型式学的画期をもってその前後のながれから分離したのか、更に、分離された一型式内の土器群の型式学的同一性を支える概念とは如何なるものであるかを、より一層純粋なかたちで提示しなければならない。しかし、我々が日常的に〇〇式と呼称している多数の土器型式のなかで、その型式概念が提示されている土器は、現状では数少ないといえよう。

今回ここでとりあげる中津式土器も、広く西日本の縄文後期初頭を飾る土器型式であり、且つ称名寺式土器との関係がとり沙汰されながらも、型式概念が不明瞭であると言わざるを得ない。故に本稿では、主に中津貝塚出土土器の捉える問題点を研究史を整理してゆくなかで浮き彫りにし、更に、従来研究者の目に触れる機会に乏しかった水原岩太郎氏報告の中津貝塚出土土器のうち主たるものを紹介し(註2)、諸氏のより一層の検討を期待する次第である。

研究史的考察

中津貝塚は現在の岡山県倉敷市に位置する。1930・31年に発掘され、1935年、水原岩太郎氏によって出土土器が紹介されている(註3)。その後1938年、三森定男氏により中津式土器なる名称が用いられ、土器型式としての中津式土器が設定され

た(註4)。そのなかで、「中津貝塚の基調をなす磨消縄文手法を有する一群の土器である。黒褐色薄手、土質は良好、口部の内傾する鉢形、或は口部が外彎し僅かにくびる頸部からやや外に張る腹部に移行する深鉢等がある。文様は口縁部に幅広く施されることが多いが、腹部の張るものでは腹部にも及んでいる。浅い鉢形では全面に施されることになる。器面の調整は一般に良好であるが、中には漆状の光沢を有するものもある。磨消縄文の手法には完全に面構成の意識が窺われる。中にはAnadara属の貝殻の厭痕を文様面に押捺し、磨消縄文的効果をあげているものもある。縄文を伴わないが全く文様器形を同じうするものがある。前者と同じく中津式として一括すべきであろう。」として中津貝塚出土の土器群(図1-2・図2-3等)を図示された。しかし氏の論考は、西日本の代表的な遺跡(例えば北白川・津雲・船元等)の出土土器を分類し、詳細に観察したものであって、中津式土器とは中津貝塚出土土器の名称である以外、その設定に関して他に積極的な根拠は見い出せない。

その後1950・51年、山内清男氏によって岡山県福田貝塚が調査されたが「その成果としての編年の問題は、山内清男氏が口頭で研究発表されたというが、今日では伝説的なものとなっている。きわめて簡単な概説が木村幹夫・鎌木義昌「中国地方の縄文文化」日本考古学講座3、河出書房1965年に記されているものによるほかない」とされている(註5)。そのきわめて簡単な概説によれば、後期の土器が、福田K I式、K II式、彦崎K I式、K II式、福田K III式土器とされたことであり、その成果をふまえたと思われる記述については、「後期縄文土器(前半)」については中津式土器とし、「福田K I式土器とは微細な点で差異があるが、大体共通の特徴を持っている。無文土器はヘナタリによる条痕が著しく、有文土器は曲線的な沈線の間を、縄文、あるいは巻貝を回転した圧痕でうずめ、いわゆる磨消縄文の最も良く使用され

る仲間である。器形は直口の甕、頸部の開いた深鉢が多く、皿状の浅い形のものを知られている。底部は縁のある凹底が多い。」と述べている(註6)。つまり、「瀬戸内の土器編年にしましても、故山内清男先生が口頭で述べられた案が基本になっているようであります。したがって現在まで踏襲され基本的な土器型式でありながら、その定義については不明な点が多いわけであります。」(註7)というわけであるのだが、ここで、現在我々が踏襲している後期初頭の型式名称が福田K I式ではなく中津式であること、又、福田貝塚出土の福田K I式土器と中津貝塚出土の中津式土器との差異も、細かな点ではあるが問題となる。前者に関しては残念ながら現在では知る術はない。後者に関しては、福田K I式と思われる土器(福田貝塚出土土器のうち、我々が日常的に中津式土器と呼称し得るもの)と中津貝塚出土土器の差異を明確に指示し得ないこと、更に、筆者も福田貝塚出土の土器を実現したが、この差異については現状では指摘し得ないと判断できる。

研究史の有効性とは、単に事象を年代順に羅列してゆくだけでなく、先学の認識の変遷を明らかにすることにより、それらを我々の認識の糧として、研究を推し進めてゆくための基盤とすることである。が、現在の瀬戸内の編年の基本が、山内清男氏の口頭による編年であり、知る術がないのでは、瀬戸内の縄文土器の編年研究を研究史的に考察するのは困難であると言わざるを得ない。

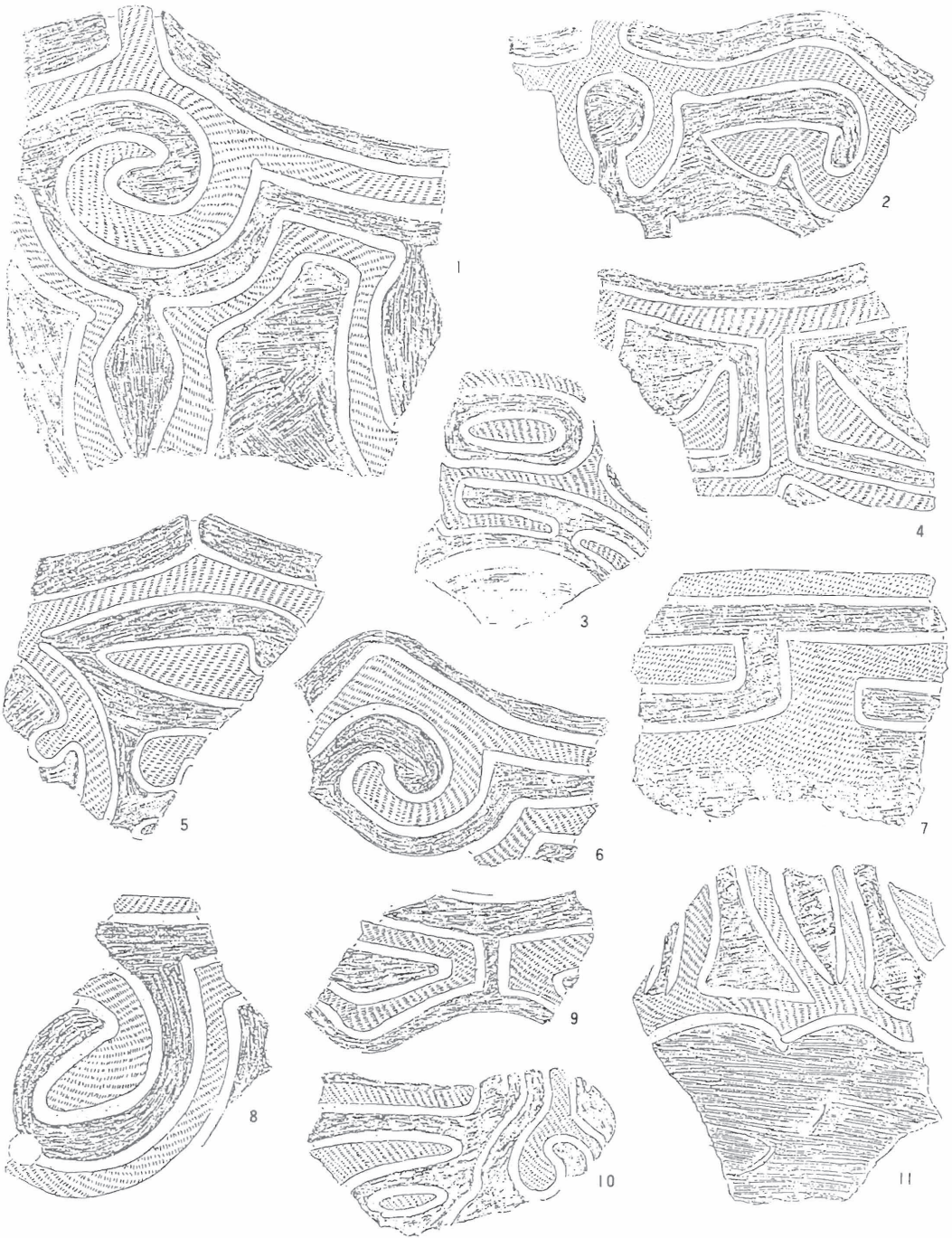
山内口頭編年以後の研究に於いても、その弊害故、型式概念について言及している論考は皆無に等しい。例えば1967年、間壁忠彦氏によって報告された岡山県日羽建行田遺跡出土土器について「縄文後期初頭中津式土器をほぼ単純に示した」としながらも、「中津式のかなり完備した型式内容を示す報告が極めて少ないため、これだけの資料で中津式の内容を論ずることは困難である」としている(註8)。しかし、同じく間壁氏によって「中津式土器の内容そのもの」として報告された里木貝塚出土の中津式土器に関する記述は、「中津式に一般にみられる縄文に沈線を加えたもの、磨消文、巻貝(ヘナタリ)による磨消疑縄文、巻貝疑縄文、沈線文だけの土器、ヘナタリ条痕の土器、へらみがきの浅鉢形土器で構成される。」という土

器組成に関するものであり(註9)、型式概念については何ら述べられていない。更に、瀬戸内地域の縄文後期の編年に一応の見通しをたてたと評価されている広島県洗谷貝塚に関しても、その記述は「3区貝層、4区北西半貝層で一括して出土した」Ⅶ類を中津式土器とし、まとめのなかで、磨消縄文と沈線文土器の割合、モチーフ、文様構成等について、極めて簡単に中津貝塚出土土器群との比較をしているのみであり、決して型式概念に言及しているとは言い難い(註10)。

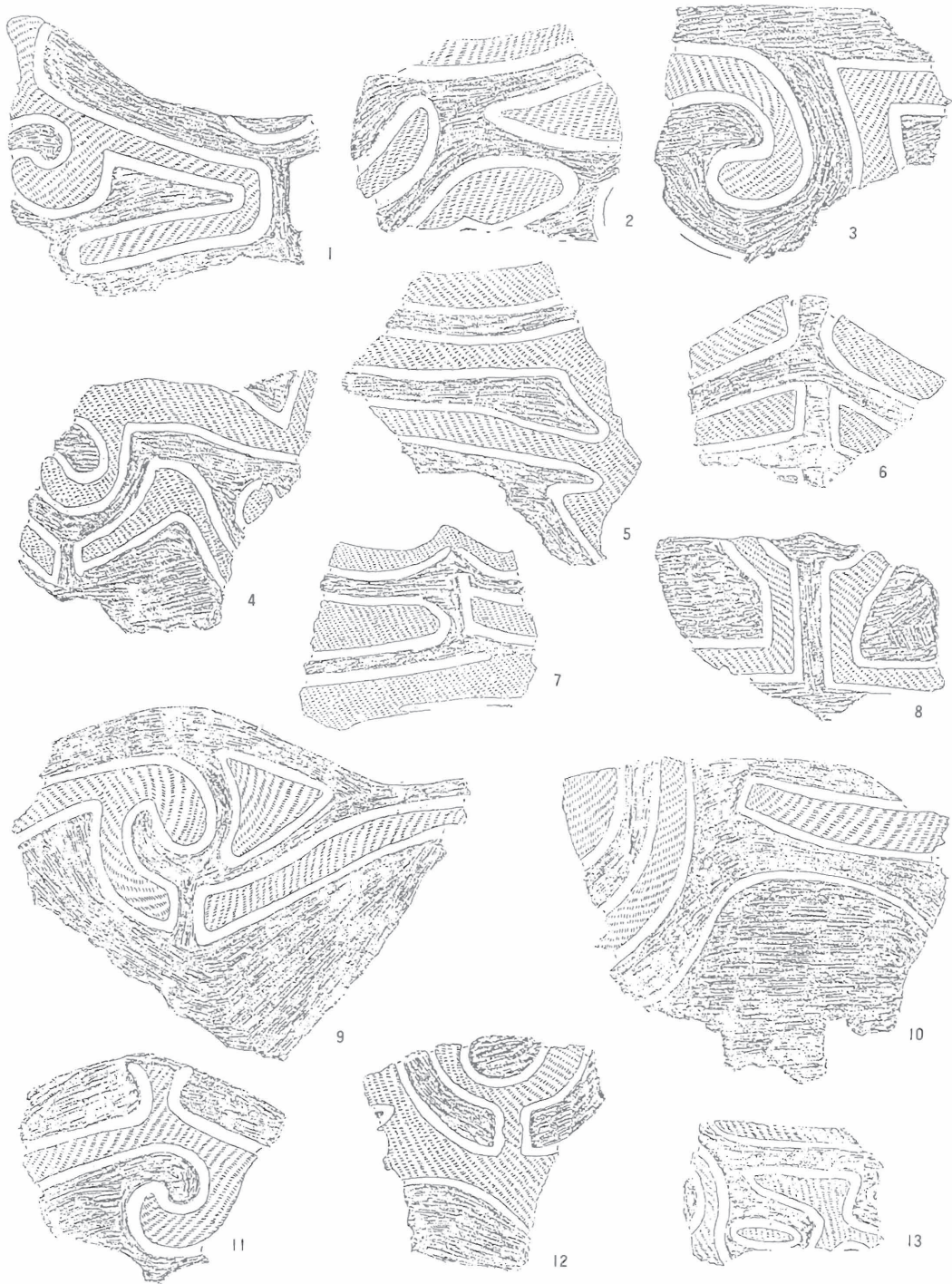
このように、中津式土器の弁別方法は、研究者の共同主観の中に埋没しきっており、未だ明確な概念をもっているとは言い難い。

中津貝塚出土土器の捉える問題点

関東の称名寺式土器、及び、西日本の中津式土器は、共に縄文時代後期初頭を飾る土器型式である。近年称名寺式土器の最古段階に位置づけることのできる土器群が公表された(図4-14・15)。これらは口縁部文様帯(区画文)+胴部懸垂文構成をとるもので、我々はこれらの土器群を、系統的側面はさておき、「地域的・時期的に細分された一単位」(註11)という側面から称名寺式土器と呼ぶことに依存はない。と同時に、図4-17に示した土器群は、やはり口縁部文様帯(区画文)+胴部懸垂文構成をとり、称名寺I貝塚・松風台例との型式学的類縁性を示すと同時に、併行関係を捉えることができよう。とするならば、日野谷寺例をも称名寺式土器に併行する中津式土器として捉えてゆかなければならない。が、中津貝塚出土土器群をもって感覚的に捉えていた中津式土器のイメージをもってするならば、西日本の研究者ならずとも躊躇せざるを得ない(註12)。とするならば、今、日野谷寺例と中津貝塚出土土器群を中津式土器として包括し得る型式学的概念を提出しなければならない(註13)。従来のイメージを型式学的根拠へと転化してゆかなければならない。が、残念ながら、この点について言及している論考は筆者の知る限りでは見あたらない。又、筆者自身、今、明確に中津式土器の型式学的概念を提示することができない。しかし、近年の資料の増加により、中津式土器の上限を如何なる型式学的画期をもって規定すべきかという点に関して、わずかながらで



第1图 中津貝塚出土土器



第2図 中津貝塚出土土器



第3圖 中津貝塚出土土器



第4図 1~13, 中津貝塚 14, 松風台(神奈川) 15, 称名寺I貝塚(神奈川) 16, 裏陰(京都)
 17, 日野谷寺(京都) 18・19, 仏並(大阪) 20, 柳谷口(京都)

はあるが、見通しを立て得たので、予察として中津式土器の成立について述べてみたい。

近畿地方中期末の編年研究に関しては、泉拓良氏により成果があげられているので、ここで詳細には触れないが(註14)、泉氏の謂うところの北白川C式・深鉢A類は、加曾利をⅢ式土器(古段階)に類似した侵入型式である。これらの土器群は、口縁部文様帯が肥厚及至屈曲という器形による作出によるため、中期最末まで、図4-16・18・19に示すように、口縁部文様帯(区画文)+胴部懸垂文構成を保持し続ける(註15)。今これらの土器群と、日野谷寺例、更には松風台・称名寺Ⅰ貝塚例を比較するならば、口縁部文様帯と胴部文様帯との区画方法が、前者では口縁部文様帯の段状肥厚であり、後者は、肥厚下に沈線が獲得され、区画方法が段状肥厚から沈線へと転化しつつあることであろう。更にこの画期を契機に口縁部文様帯の縄文が胴部へ流入してくることも忘れてはならない。このような点から鈴木徳雄氏は、中津式土器の型式学的な上限は、これら口縁部文様帯(区画文)+胴部懸垂文構成をとる器種に関しては、口縁部文様帯の段状肥厚下に沈線が獲得されることをもって規定し得るとした(註16)。

口縁部文様帯段状肥厚下に沈線が獲得される要因に関しては、段状肥厚の消失化→沈線の獲得という過程からすれば、段状肥厚の消失化を説明せねばならない。

口縁部文様帯段状肥厚の消失という器形の変化を考えるには、土器製作を担った人間をも射程に置かなければならない。泉拓良氏によれば、近畿地方中期末の土器群には、口縁部文様帯を強い屈曲によって作出する丹後地方の土器群(図4-20)と、段状肥厚により作出する近畿中央部の土器群(図4-18・19)と、大きく分けて2つの地域差があるという(註17)。口縁部文様帯段状肥厚の消失という器形の変化を説明するには、現段階では、この丹後地方と近畿中央部の2地域の土器製作を担った人間の積極的な交渉が、その要因として考え得るのではなかろうか。

おわりに

中津貝塚出土土器の抱える問題点と題し、研究史的な考察から、山内清男の口頭編年が、瀬戸内

地域の縄文後期編年研究に与えた弊害を指摘し、更に近年の資料増加に伴い認識され始めた古相の中津式土器を、型式学的概念が不明瞭である従来の中津式土器に包括してゆくための糸口を述べてみた。いわずもがな筆者の力量不足と時間的制約故に駄文となってしまったことをお詫びしたい。

今後、中津式土器を研究してゆくうえで数多くの課題が残されている。中津式土器の成立を近畿地方に求め得るならば、当該地域に於ける研究史を整理していくことが必要であろうし、中期末から後期初頭にかけての地域性とその交渉に関しても編年研究を推し進めてゆくなかで注目してゆかなければならない。又、中津式土器の瀬戸内地域と近畿地方での地域差や、福田KⅡ式への変遷についても、未だ研究は停滞気味であると言わざるを得ない。更に、称名寺式土器の成立に関する問題点や、称名寺式土器との対応関係についても研究を深めてゆかなければならない。このように中津式土器は多くの課題を抱えているわけであるが願わくは拙稿が今後の研究へむけての一助となれば幸いである。

文末ではあるが、本文を草するにあたって鈴木徳雄氏には数多くの御教示を得た。又、玉田芳英氏には、研究史に関して種々御教示を得ると共に、中津貝塚出土土器資料の集成に便宜をはかっていたいただいた。更に、石井寛・泉拓良・稲村晃嗣・土肥孝の諸氏には、中津式土器の理解について御教示していただくと共に、文献収集・資料実見等に関し多くの便宜をはかっていたいただいた。記して感謝いたします。

註

- 1) 実践的な例として、安孫子昭二「加曾利B式とその細分」『縄文土器大成』第3巻 1982などがあげられよう。
- 2) 水原岩太郎『中津貝塚縄文土器紋様』1935
今回引用した図は、解説によれば「実物大に模写した」ものであり、本稿での縮尺は約 $\frac{1}{2}$ と考えていただきたい。尚、この報告書の入手にあたっては、玉田芳英・石井寛氏両名に協力していただいた。記して感謝いたします。
- 3) 文献(2)
- 4) 三森定男「先史時代の西部日本(下)」『人類学

- ・先史学講座』第2巻 1938
- 5) 間壁忠彦「縄文期彦崎K II (竹原) 式土器をめぐって『倉敷考古館研究集報』第15号 1980
- 6) 鎌木義昌・木村幹夫「中国」『日本考古学講座』3 1956
- 7) 平井 勝「瀬戸内地域における縄文時代研究の課題」『考古学研究』32-1 1985 更に間壁忠彦氏も文献(5)に於いて、広江・浜遺跡の報告に際し、「中部瀬戸内地方の縄文後期の編年の型式名である中津(福田K I) - 福田K II - 津雲A・彦崎K II (竹原) - 福田K III (馬取) という概説書に示され、また一般的にも行われているものに従ったままであるが、実はそれらの基本となる型式の内容は、必ずしも明確でない面をもつため、分類にはかなり困難があった。その理由は、縄文後期の型式名の由来した主な遺跡である岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚、同倉敷市福田町福田貝塚の正式報告がないために、比較対照すべき基準を欠いていることによるもので、この点は常々、多くの者が不便を感じている所でもある」と述べ、その幣害について言及している。
- 8) 間壁忠彦「岡山県昭和町日羽ケンギョウ田遺跡」『倉敷考古館研究集報』第3号 1967
- 9) 間壁忠彦「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号 1971
- 10) 小都 隆『洗谷貝塚』1976 洗谷貝塚の評価に関しては、間壁忠彦氏が文献(5)に於いて簡単に触れている。
- 11) 佐藤達夫「土器型式の実態」『日本考古学の現状の課題』1974
- 12) だからといって、図1-11・図4-11, 12に示した口縁部文様帯(区画文)+胴部懸垂文構成をとる可能性のある土器群の存在のみをもって中津式土器のイメージを拡大することはナンセンスである。
- 13) 言うまでもなく、中津式土器の型式学的概念を提示せずして、日野谷寺例に併行する関西の土器群に対し新たな型式名称を冠することは避けなければならない。
- 14) 泉拓良「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」

- 『京都大学埋蔵文化財調査報告 III』1985
- 15) 鈴木徳雄氏の御教示による
- 16) 鈴木徳雄氏が1986年1月11日、「称名寺式土器の文様構成と変遷」(土曜考古学会1月例会・於大宮市立博物館)と題して発表した内容を、同氏の承諾を得て使用させていただいた。氏の発表内容に対しての筆者の理解及び本稿での表現に不備な点があれば、言うまでもなくそれらの責はすべて筆者にある。
- 17) 泉拓良氏の御教示による。

その他の参考文献

- 1) 三森定男「西南日本縄文土器の研究」『考古学講叢』1 1936
- 2) 鎌木義昌他「瀬戸内」『日本の考古学』II 1965
- 3) 森崎寿和他「西日本」『新版考古学講座』3 1984

図版引用文献

- 1) 大宮町教育委員会『裏陰遺跡発掘調査概報』1979
- 2) 港北ニュータウン埋文調査団『称名寺式土器に関する交流研究会 資料集』1985
- 3) (財)大阪府埋蔵文化財協会『仏並遺跡』1986

追記

脱稿後、飯塚博和氏の御教示により、福田貝塚の発掘調査に関する簡単な概要が『日本考古学年報』3 昭和25年度に記載されている事を知った。鎌木義昌氏記述の調査概要に依れば、「3区に分けて発掘した。-中略- 第I第II区よりは、後期縄文式土器が3層に分離され、3型式の存在が明瞭となった」ということである。山内清男氏の福田K I式設定の型式学的根拠に関しては知る術はないが、少なくとも、層位的成果が型式設定の根拠と強く結びついていることは確かであろう。尚、細かな問題ではあるが、福田古城遺跡とは、近年刊行された『岡山県史』の付図を見れば明らかのように、我々の謂うところの福田貝塚であろう。

(1班 本部)